



Title	心理動詞を伴う使役移動構文に関する構文文法的分析
Author(s)	中尾, 朋子
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2020, 2019, p. 41-50
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/76979
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

心理動詞を伴う使役移動構文に関する構文文法的分析*

中尾 朋子

1. はじめに

英語の使役移動構文 (caused-motion constructions) は、目的語位置に示される名詞句を移動させるという意味を表す構文である。使役移動構文は多様な動詞が生起することができ、その使用例も広範囲に及んでいる。(1a) のような具体的なものの移動を表すタイプもあれば、(1b) のような人の移動を表すタイプの使役移動構文もある (Goldberg 1995)。この構文の形式と意味は (2) のように提示される。

(1) a. John threw the ball over the fence. (Hilpert 2014: 35)

b. The professor invited us into his office. (Hilpert 2014: 35)

(2) Syn = [NP_X V NP_Y PP_Z]

Sem = 'X causes Y to move along a path Z / toward a goal Z'

(Goldberg 1995, Hilpert 2014, etc.)

人の移動を促すタイプである心理動詞を伴う使役移動構文は、(3) のように、主語が心理的に目的語に働きかけて移動させるという意味を表している。たとえば、(3a) のように、熊が彼を怖がらせて森から追い出したという意味で、(2) と共通した意味を表している。しかし、使役移動構文に生起する心理動詞には一定の幅があり、(3) に見られるように、scare, frighten のような恐怖を引き起こす動詞類は使用可能である。

(3) a. The bear {scared/frightened} him out of the forest.

b. * Mary {angered /pleased} him out of her house.

本稿では、(3a) のような frighten タイプの心理動詞を伴う使役移動構文を対象として、一つの構文としてどのような性質を持つのかを明らかにする。事例における動詞やその構成要素に注目し、事例の考察を通して、どの程度の具体性のあるレベルの構文を認めていくことが必要か、動詞や他の構成要素がどのような役割を果たすのかについて議論を深める。

* 本稿は、日本英語学会第 34 回大会スチューデント・ワークショップ「構文文法的アプローチの展望：事例レベルでの『構文』分析の可能性」における口頭発表の内容を加筆・修正したものである。ワークショップのコメントーターをしていただいた早瀬尚子先生には、議論構想の段階より有益なアドバイスやコメントをいただいた。記して、感謝の意を表したい。

2. 先行研究

2.1. 心理動詞

本節では、心理動詞の一般的な特性を概観していく。まず、経験者 (Experiencer) を目的語にとる心理動詞の主語は表す事態によって 2 種類の主語に分けられている。

- (4) a. Thunderbolts frightened Bill.
- b. John (deliberately) frightened Bill.
- (5) The crocodile scared us.

(4a) の主語は、原因 (Cause) を表す。一方、(4b) では、動作主 (Agent) を表す。また、(5) のような主語は、使用状況の意図性の有無によって動作主としても、原因としてもみなせる。実際に意図的に主語が働きかけを行っているかどうかで、経験者の使役の意味を持つ心理動詞には 2 種類の性質がある。(6) のように、frighten, scare などの動詞は非状態的な性質を共有しており、進行形を取ることができる。

- (6) a. Odd noises were continually scaring Sue. (Pesetsky 1995: 30)
- b. ?? Odd noises were continually depressing Sue. (Pesetsky 1995: 29)

このような性質を含め、Hatori (1997)は、このような frighten, scare タイプの動詞のような動的 (dynamic) な心理活動を示す動詞類は前置詞句と生じることができると提案している。つまり心理動詞を伴う使役移動構文は、動的な心理活動を表す動詞でかつ恐怖の感情を表すような動詞が可能であると言える。

また、Peña Cervel (2015) は、frighten などの動詞のメタファー的な特性を論点に、動詞と構文の特性について注目している。frighten タイプと構文の適合性について、心理動詞の恐怖の感情に働きかけをする意味を持つ frighten タイプの動詞の意味と使役移動イベントはメタファー的な対応関係があることが動機付けられると論じられている。(7) のようなメタファー的な関係から、メタファー的に心理動詞の動的な意味の側面が物理的な働きかけの使役と対応関係にあると論じている。

- (7) a. AN EXPERIENTIAL ACTION IS AN EFFECTUAL ACTION (Peña Cervel 2015: 1248)
- b. AN EFFECTUAL ACTION IS CAUSED MOTION (Peña Cervel 2015: 1248)

ある一定の心理動詞の意味はそのメタファー関係が成立できるタイプになっていると考えられる。しかし、Peña Cervel (2015) は、ある一定の心理動詞クラスと構文との結びつきの動機付けについて分析を与えているが、具体的な構文の性質については議論されない。そこで、本稿で対象としている使役移動構文における具体的な動詞が関連する性質につい

ての議論はなされていないため、具体的な動詞類が結びつく構文としての性質を探りたい。

2.2. 使役移動構文の構文的な特性

心理動詞の主語は、前節で見たように動作主と原因という2つの役割を表す。使役移動構文の主語の特性については、Goldberg (1995) において主語は動作主 (Agent) および 自然の力 (Natural Force) でなければならないことが提示されている。(8) のように心理動詞を伴う構文においても同様に動作主が主語となっていることがわかる。また、(9) と (10) のように杖や野球のバットといった道具を表す主語は容認できない。つまり、(11a) の動作主や (11b) のような自然の力は物理的な使役のソースを表すものであるため容認される (cf. Hilpert 2015)。

(8) Sam frightened the mouse out of its hiding place.

(9) a. * His cane helped him into the car. (Goldberg 1995: 165)

b. His cane helped him.

(10) a. * The bat hit the ball across the net.

b. The bat hit the ball.

(11) a. Chris pushed the piano up the stairs. (Goldberg 1995: 165)

b. The wind blew the ship off course. (Goldberg 1995: 165)

松本 (2002) は、この制約に対して不十分な点を論じ、(12) のような心理動詞を伴う使役移動構文の事例を挙げて、主語が意図性を持たない場合にでも可能であると指摘している。

(12) The sight {frightened/scared} the children out of the room. (松本 2002: 196)

(12) で見られる主語の性質は frighten, scare といった心理動詞によるもので、Goldberg (1995) が提案する使役移動構文の意味制約に適合していない。この場合では、心理動詞を伴う使役移動構文の主語は使役移動構文の性質で決まっているということではなく、生起する動詞の特性が大きく関わっていると考えられる。

次に、使役移動構文の中心的な意味は、動詞の表す働きかけによって目的語の対象となる人・物体が移動するという意味である。(13a, b) の例では、共通して主語の働きかけによる実際の移動を表す。

(13) a. John kicked the can into the trash box.

(= John caused the can to move into the trash box and then the can moved into the trash box.)

b. The bear scared him out of the forest.

(= The bear caused him to move out of the forest and then he moved out of the forest.)

2.3. 心理動詞を伴う使役移動構文

これまでみたように、使役移動構文と共起する心理動詞類は限られている。Peña Cervel (2015) においては *scare, alarm, terrify, terrorize, panic* といった恐怖の感情を引き起こさせる意味を持つ心理動詞は使役移動構文に生起できるとコーパスの検索から事例を挙げている (= (14)-(18))。ここでは、共通の意味を持つ心理動詞が同じ構文パターンをとることができると思われる。これらの構文事例は、ある程度の類似する意味を持つ心理動詞が一つの構文カテゴリーを成していると思われることができる。

(14) What Uptmore saw next nearly *scared* him *off* the gate he was standing on.

(Peña Cervel 2015: 1267)

(15) My dad *alarmed* me *out of* his house again.

(Peña Cervel 2015: 1267)

(16) ...whenever stewards appear, violent attacks and intimidation are used to create a climate of fear and escalating tension in an attempt to *terrify* protesters *out of* the field.

(Peña Cervel 2015: 1268)

(17) A small minority in Iraq accuse Kurds of trying to *terrorize* them *out of* their homes in Kirkuk and surrounding areas.

(Peña Cervel 2015: 1268)

(18) Chris suffered a weighty fear of cancer that *panicked* him right *out of* bed nearly every midnight.

(Peña Cervel 2015: 1268)

構文文法的アプローチの議論においては、Croft (2003, 2012) は、同じ動詞クラスが組み込まれた下位レベルの構文 (verb-specific-constructions / verb-class-specific constructions) を設定して、それぞれの語の特性についても詳細に取り入れるべきであることを論じている。さらに、Iwata (2008) では、動詞・動詞クラスを指定した構文について詳細な語彙の意味を加味した構文研究を発展させた。このような構文観に基づくと、恐怖の感情を引き起こさせる動詞は使役移動構文の中の一つのカテゴリーを構成しており、動詞タイプが持つ心理動詞の性質を共有しているという予測が立つ。(14)-(18) の使役移動構文は、個別の動詞や動詞クラスが組み込まれたレベルの構文となっていると考えられる。以降の節では、これらの動詞クラスをとる構文パターンがどのような性質を示すのかについて考察する。

3. 事例考察

3.1. 主語の特性

本節では、コーパス等の構文事例から、どのような意味の特性があるのかについて考察していく。まず、BNC の検索では、*frighten* (50 例) *scare* (43 例), *alarm* (2 例), *startle* (1 例) の事例が見られた。Peña Cervel (2015) で示される事例で見られた動詞の種類より狭い幅で

はあるが、共通する動詞の種類が生起していることがわかる。また、心理動詞の主語の特性に注目すると、(19) の例は、動作主を表し、(20) の例では原因をそれぞれ表している。それぞれ、心理動詞の特有の性質を共有している。松本 (2002) の指摘のとおり、Goldberg (1995) の主語に関する使役移動構文の意味制約は実際の事例とは合わないと言えるだろう。

- (19) a. ...I'd begun to think that I'd *scared* you *away*. (BNC)
 b. ...so the dog barked loudly and thereby *frightened* the donkey *into* the shed. (BNC)
 (20) a. Luckily, the owner's banging on the bedroom window *scared* the thief *away*. (COCA)
 b. The bloodshed *has scared* visitors *away from* resorts in the Sinai, [...]. (COCA)
 c. Perhaps you're hearing some of these ads that are trying to *frighten* seniors *into* the voting booth. (COCA)

ここで、心理動詞を伴う使役移動構文の主語の意図性について考察する。(19a) では、主語がわざと怖がらせて目的語の *you* を追い出すという事態が考えられる。同様に、(19b) の主語は *the dog* であり、こちらの場合も意図的に吠えて小屋に入れたという事態を読み取ることができる。(19b) のような有生物が主語である場合であっても、意図的な働きかけを表しているかどうかは不明なのである。主語が有生物である事例では、様々な状況で意図性がない状況が考えられ、原因主語となることがある。また、(20) の事例の主語をみると、原因を示す名詞句も多様であるとわかる。たとえば、(21a) の主語である *the bear* が意図的に怖がらせて追い出すパターンでは、主語は動作主を表す。一方、意図性がなく、その出現や容姿などによって目的語に働きかけをするパターンもあり、原因主語を表すことができる場合もある。また、(21b) の例のように、熊の泣き声、見かけ、熊についての知らせなどを原因主語として解釈することが可能である。

- (21) a. The bear frightened the people out of the forest.
 b. {The bear's roar / The bear's appearance / The news of the bear} frightened the people out of the forest.

心理動詞を伴う使役移動構文における原因を表す主語の中には、(22) のように自然現象と捉えられるものもある。加えて、(23a) の主語は光の放出、(23b) は音の放出といった事態を名詞句で表しているものである。このように幅広く主語が原因を表す使役移動構文の事例がみられる。

- (22) Still in his pajamas Brian switched on the fountain, and the sudden spurt of water *scared* the bird *away*. (BNC)

- (23) a. A flash of lightening {frightened/ scared} Bob away from the forest.
 b. The sound of guns {frightened/ scared} Bob into his shed.

したがって、心理動詞の特性である動作主と原因を表す使役移動構文が *frighten* など心理動詞を伴うパターンで生じるとわかった。また、これらの構文例における原因主語を表す例は、幅広く使用されていると言える。そして、この心理動詞を伴う使役移動構文の全体として「主語による心理的な働きかけや原因によって、目的語である人などの有生物が移動する」という意味を共有しており、一般的な物理的な物体を移動させる意味を表す使役移動構文とも同じスキーマ的意味を持つ。言い換えると、使役移動構文のカテゴリー全体での使役移動構文のスキーマとの関連性があると想定できる。

3.2. 解釈が異なる事例パターン

主語が原因を表す心理動詞を伴う使役移動構文では、これまで考察した意味と少し異なるタイプの事例が見受けられる。(24) の例では、犬の騒々しい鳴き声と匂いによって多くの動物が付近に行かないようになっている状態だという意味を表す。この場合、目的語である動物が働きかけによって犬の近くで直接働きかけを受けたかについては不明であり、移動の使役というより移動の阻止を表しているように考えられる。

- (24) Odd-Knut has never seen one either, but that is less of a surprise as the noise and smell of his dogs *frighten* most animals *away* long before he spots them. (BNC)

また、(25a) の事例では、人々が長い間ウォーターフロントから追い出されたということではなく、ハリケーン・カトリーナの破壊を恐れウォーターフロントに行かないようにしたという解釈を持つ。同様に、(25b) ではコロナウィルスによる疫病の発生が原因で怖がって人々が移動をしないようにしているという意味である。このようなパターンでは心理的な働きかけによって目的語が移動しないようにするという、移動の阻止を表すパターンであると考えられる。

- (25) a. "The general destruction of Katrina *scared* people *off* the waterfront for a long time," Gutierrez said. (Google News)
 b. The coronavirus has affected so many people, either directly or indirectly, because so many of us were planning to go to Europe or China for our studies, but the outbreak of this disease has *scared* people *away*. (Google News)

使役移動構文の中心的な意味とは異なる解釈を示すが、それらの形式は共通するパターンである。このような解釈については、抽象度の高いレベルよりも、具体的な動詞が組み込

まれたレベルで一つの構文を捉えることが必要であり、意味を詳細に分析していくことで一般的な特性についても示唆できることがあると考えられる。

3.3. さらに具体性の高いレベルでの構文の解釈

本節では、動詞の意味と結びつく構文の意味についてさらに考察を進める。辞書では、*scare somebody off/away* の使役移動構文の形式をとる表現について (26) のような 2 つの定義が提示されている。注目すべき点は、(26a, b) とともに心理動詞の意味と移動に関連する意味が示されていることである。(26a) は使役移動構文の一般的な意味と結びつき、(26b) は前節で示した移動の阻止を意味する構文パターンを示していることがわかる。さらに方向表現 *away, off* といったパターンである場合に、解釈が 2 つ生じると考えられる。

(26) *scare somebody off/away*

- a. to make an animal or person go away by frightening them
 - b. to make someone uncertain or worried so that they do not do something they were going to
- (LDOCE)

(26) のように、心理動詞を伴う使役移動構文を 2 つの解釈から捉える。(27a) では、(26a) の意味に対応している一般的な使役移動構文の意味を表しており、主語の直接的な働きかけによる目的語移動を示す。一方、(27b) は、(26b) の意味に対応しているが、目的語の移動ではなく移動の回避・阻止を示し、ほとんどの観光客がその場所にいてそこから移動したということを表すのではなくその移動しないように働きかけたということを表している文である。以降、(27a) の構文パターンの意味を「解釈 A」、(27b) の構文パターンの意味を「解釈 B」と呼ぶことにする。

- (27) a. Mary scared the birds away from the park. (=解釈 A)
- b. The terrorist activity has frightened most tourists away from the area. (=解釈 B)

それでは、心理動詞を伴う使役移動構文の 2 種類の解釈についてさらに考察をしていく。まず、解釈 A については、(28) のように公園にいる鳥を移動させたという実際的な移動を表していることが明らかである。この場合の主語は動作主を表している。解釈 B については、(29) のように、使役移動構文の形式ではあるが、主語が原因を表し、目的語の移動が含意しないことを表している。主語の性質の違いが 2 種類の解釈に関連していると考えられる。

(28) ?? Mary scared the birds away from the park, although they were in the field.

(29) The terrorist activity frightened most tourists away from the area, but then they didn't move.

同様に、主語の性質の動作主と原因の違いから、2つの解釈を示すパターンも考えられる。(30a)は、the bear は意図性を付加でき、動作主として表し、目的語の Bob に移動を働きかけている意味の解釈 A の方を示すことができる。また、(30b) は熊に遭遇して Bob が移動したという解釈 A と熊の存在を間接的に認識して Bob が移動を回避したという解釈 B を示すことができる。したがって主語が原因を表す場合、解釈 A と解釈 B いずれの意味も示すことが可能である。

- (30) a. The bear (consciously) scared Bob away from the forest.
 b. The appearance of the bear scared Bob away from the forest.

つまり、構文の形式は共通しているが、使用される状況や主語になる名詞句の表す特性によって解釈 A と解釈 B のいずれも表すことができるとわかる。

さらに、使用状況によって主語の役割が変わり、解釈に関係している例がみられる。たとえば、自然が関わるイベントを表す場合には、使用される状況によって移動に関連する解釈が異なっている。(31a) では、主語は自然の力 (Natural Force) を示し、ハリケーン・マシューの物理的な打撃で、バハマにいた人々に心理的に影響を与え移動させたという意味で解釈 A を示す。状況が変わると主語が自然災害を表す名詞句が生起する場合、(31b) では主語は、原因を表し、地震という出来事で観光客が移動しないようにしたという意味で解釈 B を示している。

- (31) a. Hurricane Mathew *scared* them *away from* the Bahamas. (Google News 一部改変)
 b. [...] they say; “the 1980 earthquake *frightened* tourists *away* [...].”
 (Italian Days, 1989, Google Books)

このように、心理動詞を伴う使役移動構文の2種類の解釈を持つ構文パターンについての考察から、生起する動詞と方向表現のパターンは同じであっても、主語の特性や使用される状況によって全体的な意味が変わるということがわかる。

3.4. 方向表現によって異なる構文の意味特性

本節では、方向表現の種類と心理動詞を伴う使役移動構文について、意味解釈を詳細に分析していく。まず、前節で取り上げた [VNP away/off] のパターンをみると2種類の意味を示していることがわかる。(32) では解釈 A を表しており、サイレンの音の放出によって直接心理的に働きかけられ人々が移動したという意味となる。(33a, b) はどちらも解釈 B を表している。(33a) の主語は、テロリストという存在が原因で人々が近づかないようにしたという意味であり、(33b) では人々が川に行かないようにしたという意味である。

- (32) The sirens **scared** him **away**. (COCA)
- (33) a. The implications are that the terrorists **have frightened** them **away**.” (COCA)
- b. We certainly don't want to **scare** people **off** the river. This is a beautiful area that everyone should enjoy,” Krause said. (Google News)

同じ方向を表す *away*, *off* をとる構文パターンでは解釈が状況によって2つ生じることがわかる。その逆の意味を表す *into* をとるパターンについては、解釈Aの一般的な使役移動構文の意味を示し、移動の阻止の解釈は生じない。(34)の事例では、心理的な働きかけによる目的語の移動のみを表す。そして、(35)のように目的語の移動がないという意味では表すことができないとわかる。したがって、*into* 句とのパターンでは、使役移動構文の中心的意味と同じ解釈Aのみを示す。

- (34) The poachers used stones to **frighten** their rabbits **into** the net, walking about and rattling one against the other. (BNC)
- (35) * The bear {frightened/ scared} John into his shed, but John didn't (wouldn't) go in.

心理動詞を伴う使役移動構文においては、生起する方向表現の種類によって、解釈の幅が異なっていることがわかる。方向表現 *away*, *off* とのパターンでは解釈が広がるが *into* 句とのパターンでは一つの解釈のみであるため、ある心理動詞のクラスを指定した使役移動構文のパターンでの事例のレベルでは、構文の特性を捉えることができない。少なくとも、心理動詞を伴う使役移動構文は、さらに具体性の高いレベルである構成する動詞と方向表現の具体的な語彙を組み込んだレベルでの分析が必要であると言える。

4. 結語

本稿では、心理動詞を伴う使役移動構文の事例の考察をすることにより、主語の特性と構文の意味が、一般的な使役移動構文とは異なっており、心理動詞特有の性質が大きく関わっていることと、動詞や生起する主語の名詞句・方向表現との相互作用により構文の意味の広がりを見せていることがわかった。心理動詞を伴う使役移動構文をとらえるためには、心理動詞の性質を分析することだけではなく、方向表現とのコロケーションパターンといった語の意味・用法に構成されている特性についても記述をしていく必要がある。特に、原因主語が関わって形式が共通していても2種類の意味が解釈でき、使役移動を表すパターンと移動の阻止を表すパターンがあるということが指摘された。使役移動構文は、ある一定の動詞クラスや、個別の動詞の意味に加え、主語にくる名詞句の特性や方向表現といった動詞以外の構成要素や使用状況の情報なども複雑に絡みあった構文であることを示唆する。

参考文献

- Boas, Hans C. (2003) *A constructional approach to resultatives*. Stanford: CSLI Publications.
- Croft, William (2003) Lexical rules vs. constructions: A false dichotomy, ed. by Hubert Cuyckens, Thomas Berg, René Dirven and Klaus-Uwe Panther, *Motivation in language*, 49-68, Amsterdam: John Benjamins.
- Croft, William (2012) *Verbs: Aspect and causal structure*, Oxford: Oxford University Press.
- Goldberg, Adele (1995) *Constructions: A construction grammar approach to argument structure*, Chicago: University of Chicago Press.
- Goldberg, Adele (2006) *Constructions at work: The nature of generalization in language*, Oxford: Oxford University Press.
- Grimshaw, Jane (1990) *Argument Structure*, Cambridge, MA: MIT Press.
- Hatori, Yuriko (1997) On the lexical conceptual structure of psych-verbs, ed. by Taro Kageyama, *Verb semantics and syntactic structure*, Tokyo: Kurosio Publishers.
- Hilpert, Martin (2014) *Construction grammar and its application to English*, Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Iwata, Seizi (2008) *Locative alternation: A lexical-constructional approach*, Amsterdam: John Benjamins.
- 松本曜 (1997) 「空間移動の言語表現とその拡張」 田中茂範・松本曜 (編)『空間と移動の表現』第2部, 126-230, 東京: 研究社.
- 松本曜 (2002) 「使役移動構文における意味的制約」 西村義樹 (編)『認知言語学Ⅰ: 事象構造』, 187-211, 東京: 東京大学出版.
- Peña Cervel, María Sandra (2015) A constructionist approach to causative *frighten* verbs, *Linguistics* 53 (6), 1247-1302.
- Pesetsky, David (1995) *Zero syntax: Experiencers and cascades*, Cambridge, MA: MIT Press.
- 鈴木亨 (2010) 「項の共有と非顕在項の認可-心理インパクト動詞を伴う非選択目的語 結果構文」『山形大学人文学部研究年報』7号, 1-22.
- Van der Leek, Fredereke (1997) Caused-motion and the 'bottom-up' role ed. by Ad Foolen and Fredereke Van der Leek, *Constructions in Cognitive Linguistics*, 301-331, Amsterdam: John Benjamins.

コーパス

British National Corpus. [BNC]

The Corpus of Contemporary American English. [COCA]

辞書

Longman Dictionary of Contemporary English 5th Edition (2009). [LDOCE]

Oxford Advanced Learner's Dictionary 8th Edition (2010).